

青森県内における 平安時代の非ロクロ成形坏について

新 山 隆 男（青森県埋蔵文化財調査センター）

1 はじめに

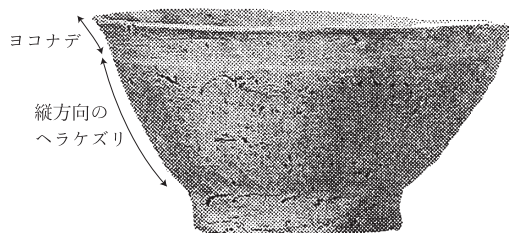
青森県内において平安時代（9世紀以降）の土師器坏と言え、ロクロ使用のものが一般的であるが、わずかながら非ロクロ成形で外面縦ケズリ・口縁部ヨコナデの坏が混じってくる遺跡が見られる。筆者はこれまでの整理作業において、同じような特徴をもつ非ロクロ成形坏を扱うことがあった。青森県平川市（旧尾上町）五輪野遺跡と青森市新田(1)遺跡の資料であるが、類似したその資料を扱ったことで、この非ロクロ成形坏の詳細について調べてみたくなった。本稿では、青森県内における平安時代（9世紀以降）の非ロクロ成形坏の分布、同資料の集成等からその成果をまとめ、時期・年代観等の考察を行うこととする。

2 取り扱う資料

本稿では、基本的に以下の条件に見合うものを「非ロクロ成形坏」とした。

- ・ロクロ未使用成形、酸化焰焼成、土師質無台坏形土器の類
- ・外面体部縦方向のヘラケズリ、口縁部ヨコナデ調整を施す類

以上の条件に見合う完形品・略完形品、もしくは口縁部から底部まで残存する資料のみを扱った。報告書によっては、皿・碗・鉢などと器種分類しているものについても、上記の条件を満たすものは含めた。また、外面ヘラナデ調整となっているものについても、縦方向に調整が施されているものや、調整の区画がはっきりしているものなどについては「非ロクロ成形坏」に含めた。また、口縁部ヨコナ



※五輪野遺跡B区第33号住居跡出土資料（図5-68）

図1 非ロクロ成形坏

デが表現されていないと判断し「非ロクロ成形坏」としたものもある。上北地方の遺跡から出土した資料については、口縁部にヨコナデは入らないようであるが、参考までに取り上げた。

なお、実見していない資料については、実測図・観察表のみでしか判断できなかったため、あくまでも筆者の判断で集成したものであり、実際は条件に合わないものが含まれている可能性もある。

3 分布

「非ロクロ成形坏」が出土する遺跡は、参考までに取り上げた上北地方に数カ所見られるが、多くは青森市（旧浪岡町含む）・弘前市・黒石市・平川市にかけての津軽地方に偏る傾向がある。地形的特徴としては、沖積地に所在する遺跡が比較的多いということがあげられる。青森平野を形成する沖積地上には、新田(1)・(2)遺跡、津軽平野を形成する沖積地上には、水木館遺跡・宮元遺跡・独狐遺跡が所在する。青森平野に所在する遺跡からは八甲田山、津軽平野に所在する遺跡から岩木山と、そ

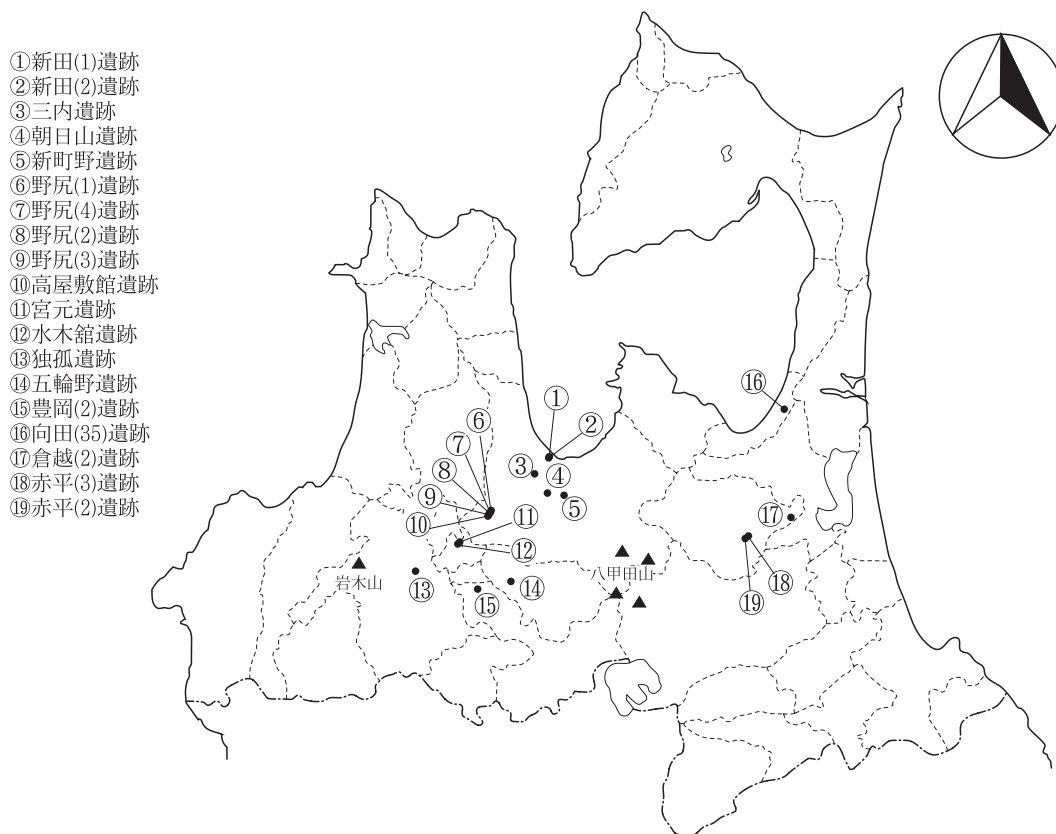


図2 遺跡の分布

れぞれ1,000mを超える秀峰が臨める立地である。また、本稿で扱う遺物が出土する遺構としては、段丘上にある遺跡では竪穴住居跡・土坑がほとんどであるのに対して、沖積地上にある遺跡では、溝跡からの出土がほとんどであるという特徴をもつ。

4 分類

青森県内における19の遺跡から出土した、前述の条件を基本的に満たす73点の資料を取り扱う。分類は「器高指数と底径指数（註1）」をもとに行い、それぞれの組み合わせによって細分した。細分については図3-3のグラフに示した通りであるが、それぞれの指数の45ラインで分割することとした。

（器高指数） A類：坏形（指数45未満） B類：碗形（指数45以上）

（底径指数） 1類：底径小（指数45未満） 2類：底径大（指数45以上）

組み合わせた分類における資料数は次の通りである。

A1類（坏形で底径が小さい類）：22点 A2類（坏形で底径が大きい類）：18点

B1類（碗形で底径が小さい類）：14点 B2類（碗形で底径が大きい類）：19点

器高指数・底径指数45ラインで分類した理由についてだが、津軽地域期における古代土器食膳具の変遷（9世紀～11世紀）をまとめた岩井浩人氏（岩井：2008）による土師器坏の分類を参考とした。岩井氏は器高指数35以上を「坏A」、器高指数27～35を「坏B」として分類しているが、今回取り扱う資料は器高指数35以上の資料が圧倒的に多いため、器高指数45を境界に「碗」という分類を設置してみた。つまり、器高指数27～45未満が「坏形」で、器高指数45以上が「碗形」ということになる。ち

なみに岩井氏は、器高指数27以下を「皿」としているが、今回取り扱う資料に器高指数27以下は存在しなかった。また、底径指数については、岩井氏の分類には取り入れられてはいないが、口径に比する底径の大小も土師器の年代観を考察する上で重要視される傾向にあるため、今回算出した指数のちょうど中間ラインにあたる指数45に設置してみた。つまり、底径指数45は、本稿資料における平均水準ということである。

次に、器高指数・底径指数それぞれの特徴について見ていく。まず器高指数であるが、A類とB類を比較すると、A類は指数が広範囲にわたり小型～大型までの幅広いタイプに分かれる。B類は指数がまとまった範囲に収まり中型タイプのみ集中するという特徴がある。中型タイプはA・B類とも口径11～14 cm程度であるが、A類に見られる小型タイプは口径10 cm前後、器高4 cm以下で、大型タイプは口径15 cm以上、器高6 cm以上であることがわかる。底径指数は、1・2類とも指数が広範囲にわたり、いずれも小型～大型タイプに分かれることがわかる。A類では、大型タイプで底径が10 cm近くの大きいものもあれば（2類）、小型タイプで底径が4 cm程度の小さいものもある（1類）。B類は、底径指数においても割とまとまった印象を受けるが、底径7 cm前後の幅広い底部を持つものも何点か含まれることがわかる（2類）。

また、内面調整及び底面についても触れておく。内面調整はほとんどがヘラナデ・ナデ調整であり、ロクロ目が残ると観察されるものやヘラミガキ・カキメ調整と観察されるものが数点含まれている。底面にはムシロ状の圧痕がつくものが多い。ムシロ状の圧痕も含め底面の様子については各報告で様々な呼称があるため、本稿においては便宜上、下記の

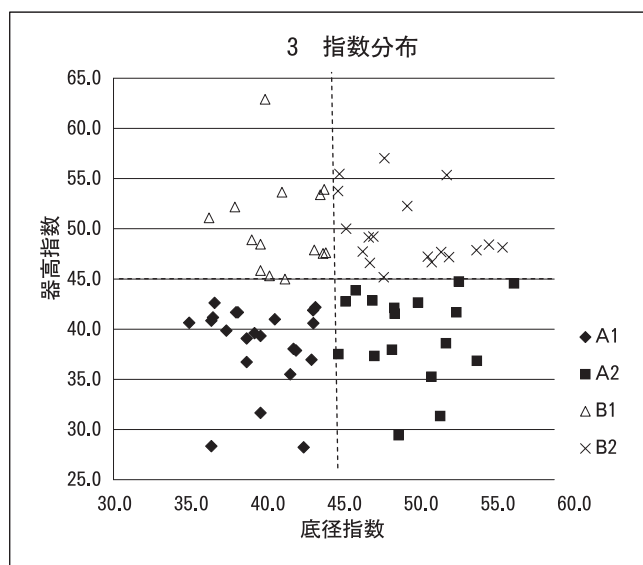
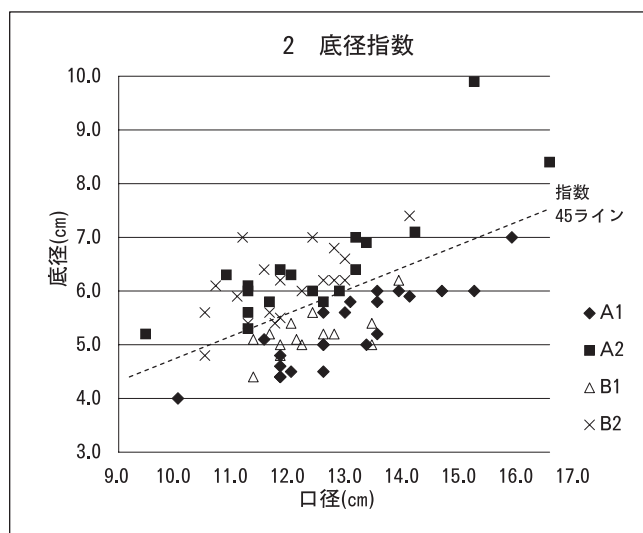
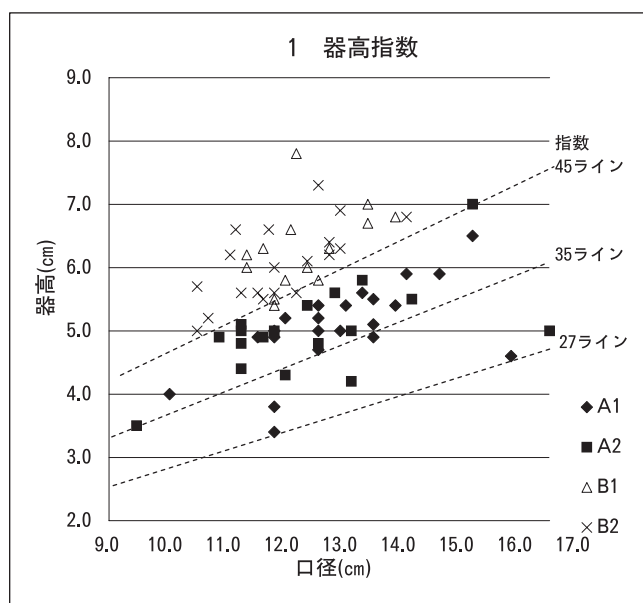


図3 器高指数と底径指数

ような呼称で統一する。

ムシロ底＝網代痕、簾痕、簾状圧痕、こも編み圧痕、菰編痕、編物痕、ムシロ圧痕

木葉底＝木葉痕

砂底＝砂底、砂敷

調整底＝ヘラナデ、ヘラケズリ、ハケメ、ケズリ、ナデ、オサエ

その他＝平滑、無調整

なお、資料における基礎データは文末の観察表にまとめた。以下、分類に従って、資料の詳細について記述していくこととする。

A1類 (図4)

遺構内では、新田(2)遺跡第73号溝跡、野尻(1)遺跡第319号建物跡、野尻(3)遺跡第5号建物跡、宮元遺跡Ⅲ-24号・Ⅳ-6号・Ⅺ-11号・ⅩⅡ-2号溝跡、水木館遺跡第80号溝、五輪野遺跡B区第34号土坑、豊岡(2)遺跡第15号竪穴住居跡、赤平(3)遺跡第13号住居跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡Ⅲ・Ⅳ・Ⅺ・Ⅻ区の資料が該当する。法量的な差は大きく、口径が10～17cm、底径が4～7cm、器高が3～7cmである。野尻(1)遺跡出土資料(4)は口径が16.3cmと最も大きく、宮元遺跡出土資料(11)は口径が10.1cmと最も小さい。新田(2)遺跡(2)、水木館遺跡(18)出土の資料には、外面に刻書・線刻が施されている。器形の特徴として、口縁部が外反するもの(3・4・5・6・7・10・12・13・15)、底部がやや張り出すもの(2・5・8・13・14・16・21)がある。底面の様子は、木葉底1点(12)、砂底1点(20)、調整底3点(2・16・21)、以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、新田(2)遺跡第73号溝跡からは把手付土器・擦文土器及び斎串などの木製品が出土している。野尻(1)遺跡第319号建物跡からは内外面黒色処理された土師器蓋、円孔・沈線文等が施文された円盤状土製品などが出土している。宮元遺跡Ⅺ-11号溝跡からは土師器の埴のほか、須恵器の大甕などが出土している。五輪野遺跡第32号住居跡からは仏具とされる鉄製の繞(鈴体部)、柄香炉の柄部(鉄製)、飾り部(銅製)、蓋部(銅製)などが出土している。赤平(3)遺跡第13号住居跡からは製塩土器、土製勾玉、菰槌などが出土している。

A2類 (図4)

遺構内では、新田(1)遺跡第31号溝跡、新田(2)遺跡第19・24・47号溝跡、野尻(3)遺跡第4号建物跡外周溝、宮元遺跡Ⅲ-24・Ⅺ-11号溝跡、水木館遺跡第231号溝、五輪野遺跡B区第21・23・24・32号住居跡、豊岡(2)遺跡第14号竪穴住居跡、向田(35)遺跡第108・109号住居跡、倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡の資料が該当する。遺構外では、五輪野遺跡A区、豊岡(2)遺跡の資料が該当する。法量的な差は分類した中で最も大きく、口径が9～17cm、底径が5～10cm、器高が3～7cmである。豊岡(2)遺跡出土資料(36)は口径が17.0cmと最も大きく、新田(2)遺跡出土資料(25)は口径が9.5cmと一番小さい。底径のみで見ると、豊岡(2)遺跡出土資料(35)は9.9cmと最も大きい。器形の特徴として、口縁部が外反するもの(24・28・29・31・33)、底部がやや張り出すもの(25・27・28・29・31・39)がある。底面の様子は全種類がほぼ同じくらいの数量であり、多種多様になっていることがわかる。その他、共伴遺物として、新田(1)遺跡第31号溝跡からは把手付土器のほか骨角器が1点出土している。新田(2)遺跡第19・24・47号溝跡からは擦文土器が出土している。水木館遺跡第231号溝からは柱状高台坏・球胴甕のほか、木製の椀が出土している。倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡からは横櫛など

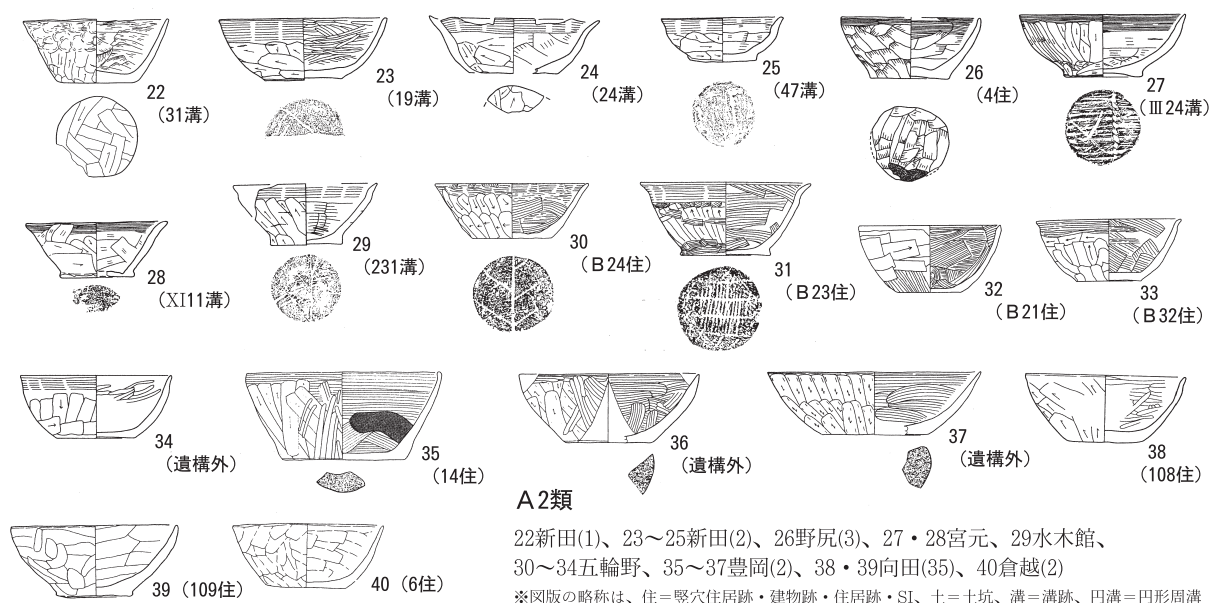
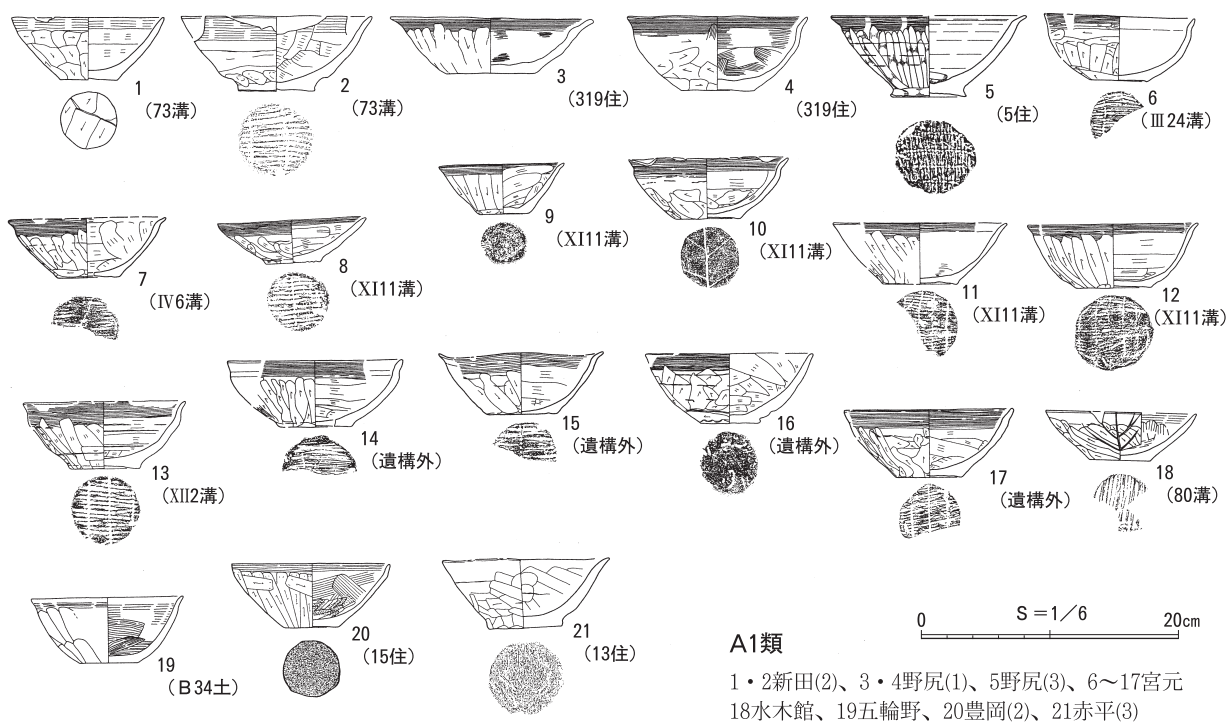


図4 A1・A2類

の木製品、繊維を編んだ編物などの特殊品が出土している。

B1類 (図5)

遺構内では、新田(1)遺跡第4号溝跡、新田(2)遺跡第73号溝跡、三内遺跡H-13・H-40竪穴住居跡、新町野遺跡第6号竪穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-083外周溝、宮元遺跡XI-11・XII-17号溝跡、赤平(2)遺跡第3号住居跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡XI区、五輪野遺跡A区の資料が該当する。法量的な差は小さく、口径は10～14cm、底径は4～6cm、器高は5～6cmの範囲内に収まる。新田(2)遺跡出土の資料には外面に墨書のあるもの(43)、刻書のあるもの(44)が報告されている。

器形の特徴として、口縁部が外反するもの（44・50・51・52・53・54）、底部がやや張り出すもの（44・51・53）がある。底面の様子は砂底4点（45・47・48・49）、調整底1点（42）、その他1点（46）以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、新田(1)遺跡第4号溝跡・新田(2)遺跡第73号溝跡からは擦文土器や斎串などの木製品が出土している。なお、新田(1)遺跡第4号溝跡からは瓢箪製容器の出土も報告されている。

B2類（図5）

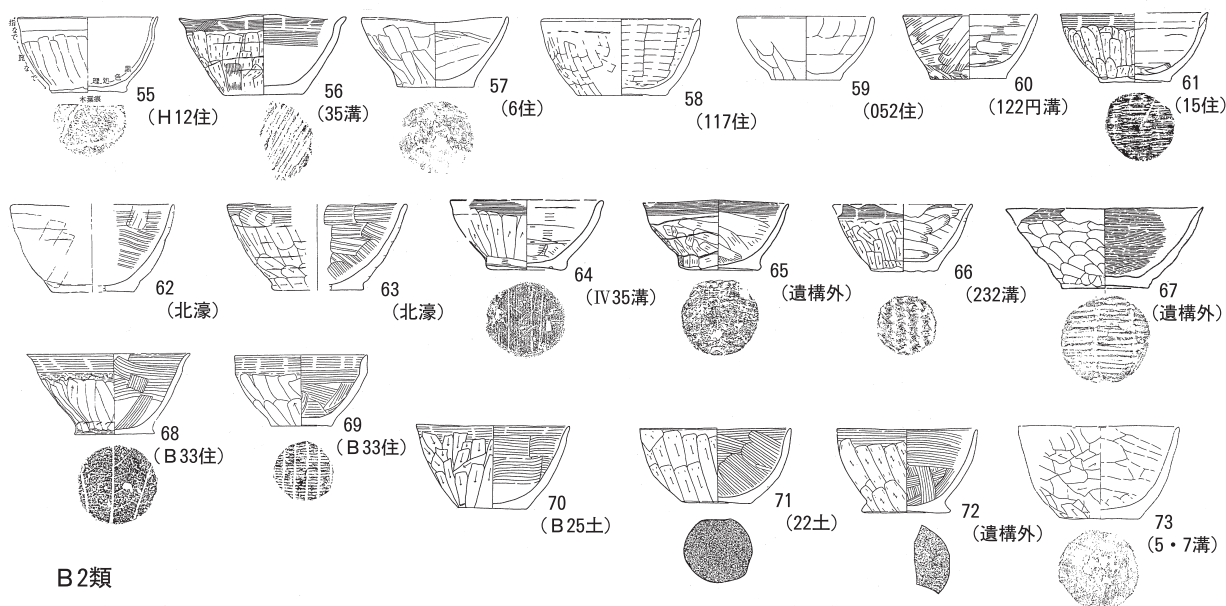
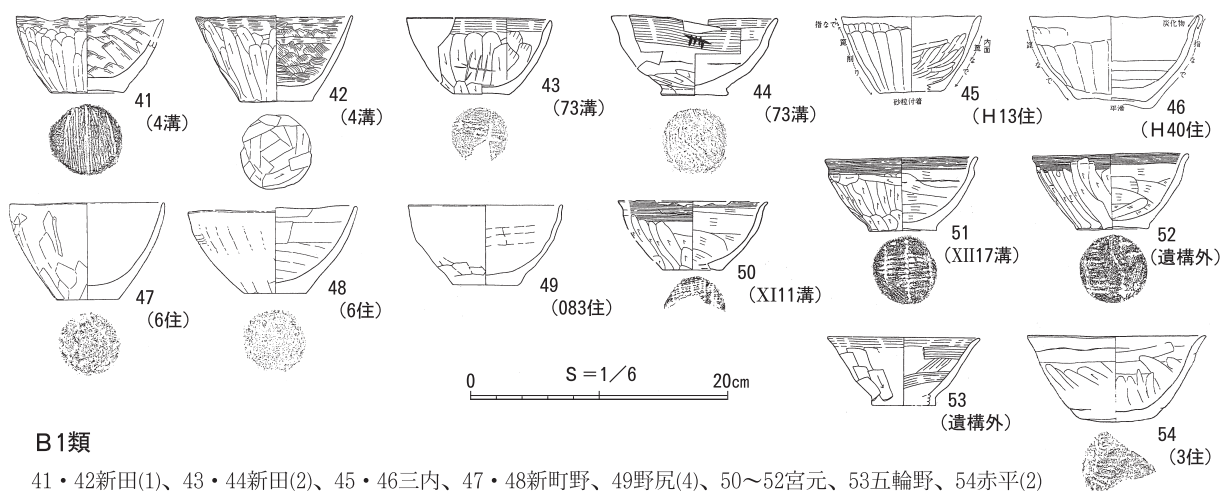
遺構内では、三内遺跡H-12竪穴住居跡、朝日山遺跡第35号溝跡、新町野遺跡第6号竪穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-052・117外周溝、野尻(2)遺跡第122号円形周溝、野尻(3)遺跡第15号建物跡、高屋敷館遺跡北濠、宮元遺跡IV-35号溝跡、水木館遺跡第232（89）号溝、五輪野遺跡第33号住居跡・第25号土坑、豊岡(2)遺跡第22号土坑、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡の資料が該当する。遺構外では、宮元遺跡Ⅲ区、独狐遺跡第2次調査、豊岡(2)遺跡の資料が該当する。法量的な差は小さく、口径が10～15 cm、底径が5～8 cm、器高が5～8 cmの範囲内に収まる。五輪野遺跡出土資料（68・69）は灯明具に転用された可能性があると報告されている。内面の様子は、三内遺跡出土資料（55）が黒色処理を施すと観察されている。内面調整は、高屋敷館遺跡出土資料（62・63）が内面カキメ調整を施すと観察されている他は、ヘラナデ・ナデ調整である。器形の特徴として、口縁部が外反するもの（56・68）、底部がやや張り出すもの（55・61・62・63・64・65・68・72）がある。底面の様子は、木葉底2点（55・68）、砂底5点（59・62・63・71・72）、調整底2点（57・60）以外は全てムシロ底である。その他、共伴遺物として、朝日山遺跡第35号溝跡からは台付坏や支脚が出土している。宮元遺跡IV-35号溝跡からは土師器の坏・甕のほかに耳皿が出土している。水木館遺跡第232号溝跡から柱状高台坏や木製品が出土している。また、五輪野遺跡第33号住居跡からは球胴甕のほか、仏具の「三鈷繞（鉄製品）」がほぼ完形品で出土している。

5 時期・年代観

本稿資料の時期・年代観について、本稿資料が出土した遺構の帰属時期・共伴遺物・炭素年代分析の結果・器形に基づいて考えてみたいと思う。

（遺構の帰属時期）

まずは、本稿資料が出土した遺構の帰属時期に照らし合わせながら考えてみる。遺構の帰属時期を判断する材料として広域テフラがあげられるが、ここでは、白頭山・苫小牧火山灰（B-Tm：註2）の有無に着目して考えてみたい。火山灰の堆積が認められる遺構が確認されているのは、三内遺跡・野尻(1)遺跡・野尻(3)遺跡・野尻(4)遺跡である。そのうち、三内遺跡は十和田a火山灰（To-a：註2）のようだが、野尻(1)・(3)・(4)遺跡はB-Tmである可能性が高い。野尻(1)遺跡319号建物跡資料（図4-3・4）、野尻(4)遺跡SI-117外周溝資料（図5-59）は、B-Tm堆積層の下から出土していると報告されている。また、直接B-Tmが堆積しているわけではないが、野尻(2)遺跡第122号円形周溝（資料：図5-60）、野尻(3)遺跡第15号建物跡（資料：図5-61）は、B-Tmを堆積する遺構と重複しており、本遺構が古いとされている。同じように、新田(2)遺跡第73号溝跡（資料：図4-1・2、図5-43・44）、野尻(3)遺跡第4号建物跡外周溝（資料：図4-26）は、B-Tmを堆積する遺構と重複しており、本遺構が新しいとされている。三内遺跡H-13号竪穴住居跡（資料：図5-45）、野尻(4)遺跡SI-052外周溝（資料：図5-58）、赤平(2)遺跡第3号住居跡（資料：図5-54）、赤平(3)第13号竪穴



※図版の略称は、住＝堅穴住居跡・建物跡・住居跡・SI、土＝土坑、溝＝溝跡、円溝＝円形周溝

図5 B1・B2類

住居跡（資料：図4-21）、倉越(2)遺跡第6号堅穴住居跡（資料：図4-40）、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡（資料：図5-73）は、B-Tm又はTo-aが遺構堆積土内にブロック状で混入するように入り込んでいるようである。また、新町野遺跡・高屋敷館遺跡・宮元遺跡・水木館遺跡では、本稿資料が出土した遺構に火山灰は確認されないものの、周囲の遺構にB-TmやTo-aが堆積しており、火山灰降下時期に近い遺構である可能性が考えられる。

（共伴遺物）

次に、共伴遺物に照らし合わせながら考えてみる。ここでは青森県内における近年の土師器・須恵器の編年研究に合わせて考えてみることにする。まず、柱状高台坏であるが、これは11世紀前半のあたりから津軽地方で使われ始めると試案されており（工藤：2000）、水木館遺跡第231号溝跡（資料：図4-29）・第232号溝跡（資料：図5-66）で共伴している。把手付土器は、10世紀後半～11世紀後半

にかけて見られるようになり（三浦：1995）、高屋敷館遺跡北濠（資料：図5-62・63）、新田(1)遺跡第4号溝跡（資料：図5-41・42）・第31号溝跡（資料：図4-22）、新田(2)遺跡第73号溝跡（資料：図4-1・2、図5-43・44）で共伴している。擦文土器は、10世紀後葉から共伴するようになり11世紀末の段階では終焉を迎えるとされている（三浦：1995）が、擦文土器は、新田(1)・(2)遺跡のほとんどの溝跡で共伴している。青森県内の擦文土器について編年研究している齋藤氏の編年に合わせると、Ⅲ群（10世紀末～11世紀前葉）に当てはまると言えよう（齋藤：2001）。また、向田(35)遺跡108・109号住居跡からは、擦文系の土器片が伴出している。埴は、宮元遺跡の溝跡などから破片が数点出土しているが、9世紀後葉～10世紀中葉頃までという編年（三浦：1995）や、底径が縮小するが10世紀後半頃まで見られるという編年（工藤：2005）がある。須恵器（五所川原産）は、五所川原窯跡群の操業期間が9世紀末～10世紀第4四半期と言われており（藤原：2007）、宮元遺跡XI-11号溝跡からは、藤原氏編年の中期（10世紀第2四半期）から後期Ⅰ期（10世紀中葉～10世紀第3四半期）に該当すると思われる坏・壺・甕などの資料がまとまって出土している。

（放射性炭素年代分析）

次に、本稿資料が出土した遺構の放射性炭素年代による分析をもとに考えてみる。新田(1)遺跡第4号溝跡覆土下層から出土した「瓢箪製容器」の表皮は10世紀後葉の年代値が示された（青森県教委：第472集）。伐採年代が示されたと考えるならば、一番新しく見積もっても10世紀後葉以降の遺物が含まれる溝跡ということになる。新田(1)遺跡第4号溝跡と新田(2)遺跡第73号溝跡は共通点が多く、どちらも溝跡と報告してはいるものの、濠跡と言ってもよい程の大溝である他、出土している遺物も共通するものが多く、ほぼ同時期の溝跡であると考えられる。

（器形）

最後に、器形によって時期・年代観を考えてみる。まず、上述した時期・年代観に合わせてみると、A1類に含まれる野尻(1)遺跡第319号建物跡出土遺物（図4-3・4）はB-Tm降下前の段階ということになり、B1類に含まれる新田(1)遺跡第4号溝跡・新田(2)遺跡第73号溝跡出土遺物（図5-41～44）はB-Tm降下後の段階ということになる。また、野尻(2)遺跡第122号円形周溝出土遺物（図5-60）・野尻(3)遺跡第15号建物跡出土遺物（図5-61）・野尻(4)遺跡SI117外周溝出土遺物（図5-58）はB-Tm降下前と考えられるが、全てB2類に含まれる。残りのA2類については野尻(2)遺跡の資料を除きB-Tmに関連する資料がない。A2類については、器高が低く底径がかなり大きくなっていくという特徴があるが、分類でも引用した岩井浩人氏（岩井：2008）の編年に当てはめると、最終段階のV-2期（11世紀中葉以降）に該当するものが含まれると言える。弘前市早稲田遺跡出土の土師器坏で編年した岩井浩介氏（岩井：2010）も同じような考えであり、編年に当てはめるとE群（11世紀中葉）に該当すると考えられる。ただ、器形のみで時期・年代観を決定することは非常に困難で、A1類が全てB-Tm降下前の年代観であったり、A2類が全て11世紀中葉頃の年代観であったりと言うわけではなく、幅広い時期にわたって存在することが調べているうちにわかってきた。これは本稿資料が特殊な器種である故なのか定かではないが、器形による時期・年代観はあくまでも参考程度にとどめ、その時期における器形の傾向を捉える程度として今回は取り扱っていきたいと考える。

以上、4つの要素から本稿資料の時期・年代観をまとめると、B-Tm降下前をⅠ期、降下後をⅡ期とする以下のような2時期に分けられ、器形の特徴等で細分した。

I - 1 期 = 9 世紀後葉～10 世紀前葉（A1 類のみ）

野尻(1)遺跡第319号建物跡

I - 2 期 = 10 世紀前葉～10 世紀中葉（B2 類のみ）

野尻(4)遺跡117号外周溝、野尻(2)遺跡第122号円形周溝、野尻(3)遺跡第15号建物跡

II - 1 期 = 10 世紀中葉～10 世紀後葉（A1 類 = 2・A2 類 = 2・B1 類 = 2・B2 類 = 2）

三内遺跡H-13号竪穴住居跡、野尻(3)遺跡第4・5号建物跡、野尻(4)遺跡SI-052、赤平(2)遺跡3号住居跡、赤平(3)遺跡第13号住居跡、倉越(2)遺跡第6号竪穴住居跡、倉越(2)遺跡第5・7号溝跡

II - 2 期 = 10 世紀後葉～11 世紀前葉（A1 類 = 11・A2 類 = 9・B1 類 = 9・B2 類 = 11）

新田(1)遺跡第4号溝跡、新田(2)遺跡第19・24・47・73号溝跡、三内遺跡H-12・40号竪穴住居跡、朝日山遺跡第35号溝跡、新町野遺跡第6号竪穴住居跡、野尻(4)遺跡SI-083、高屋敷館遺跡北濠、宮元遺跡第Ⅲ-24、Ⅳ-6・34、Ⅺ-11、Ⅻ-2・17号溝跡、水木館遺跡第80・231・232号溝跡、五輪野遺跡B区第23・32・33号住居跡、五輪野遺跡B区第25・34号土坑、豊岡(2)遺跡第15号竪穴住居跡、豊岡(2)遺跡第22号土坑、向田(35)遺跡108・109号住居跡、

II - 3 期 = 11 世紀前葉～11 世紀中葉（A2 類のみ）

新田(1)遺跡第31号溝跡、五輪野遺跡B区第21・24号住居跡、豊岡(2)遺跡第14号竪穴住居跡

6 その他

その他として本稿資料の使用目的について若干触れておく。まず、使用目的として注目される点は、仏具や祭祀的遺物と共伴する遺構が一部に見られるということである。五輪野遺跡第32・33号住居跡からは、三鈷繞・柄香炉などの仏具が共伴している。太田原（川口）氏によると、日光男体山山頂遺跡出土資料坏G類（図6）との類似から、山岳信仰や修験との関連を推察している。ただ、日光男体山山頂遺跡の坏G類は、五輪野遺跡出土資料よりも器高が低く底径が大きくなるという特徴から、器形的には本稿A2類に類似しており若干の違いが認められる。ちなみに坏G類は、「胴部及び底部を篋そぎによって整え、口縁部になで附けの一帯を加えるもの」とされており、平安時代の後期と報告されている。その他、野尻(1)遺跡第319号建物跡からは内外面黒化处理された蓋、新田(1)遺跡第4号溝跡と新田(2)遺跡第73号溝跡からは木製品の斎串が共伴している。また、本稿資料自体がもつ特徴として、新田(2)遺跡第73号溝跡から出土した資料には刻書や墨書が施される例や、五輪野遺跡第32・33号住居跡から出土した資料には煤状の物質が付着することから、灯明具と推察される例があげられる。以上のことから本稿資料の使用目的を考えると、一部の遺跡でのみ言えることであるが、食膳具というより信仰・修験、祭祀行為等に用いられた「供献具」として使用されていた可能性があるように思われる。



図6 日光男体山山頂遺跡出土遺物（坏G類）

次に、本稿資料の底面に目を向けると、一番多く見られるのが「ムシロ底」であるが、これは稲野氏が集成した繊維圧痕のC種（稲野：1995）にあたる。C種は津軽地方を中心に分布し、10世紀～12世紀に存在するとしている。ただ、注目すべきは豊岡(2)遺跡出土資料であるが、全ての資料が底面「砂底」であるということである。砂底土器については、櫻田氏（櫻田：1993）や利部氏（利部：2000）の研究があるが、それによると砂底土器は「蝦夷」関連の遺物ではないかとの見方があり、豊岡(2)遺跡出土資料については共伴遺物にも特殊性が見られることから、蝦夷との関連性も考慮した方がよいものと思われる。底面砂底は、三内遺跡、新町野遺跡、野尻(4)遺跡、高屋敷館遺跡出土資料にも見られる。

最後に器形について補足するが、本稿資料は全て坏として扱ったものの、最初から坏として製作されたものと、甕の製作途中で坏に変更されたものが含まれているように感じられる。また、木器の模倣と思われるものや、胎土においても違いが見られるものもあり、今後はこういった観点からも考察する必要性があると感じられた。

今回、青森県内の資料のみについて集成したが、近隣の秋田・山形県においても本稿資料が存在するようである。また、擦文系の土器も共伴することから北海道との関連性はどうかなど、興味は尽きないところである。

7 まとめ

本稿資料についての分布や器形分類、時期・年代観の考察等についてまとめると以下ようになる。

- ・分布の特徴として、津軽地方の遺跡から偏って出土する傾向があり、他は上北地方の数カ所の遺跡で出土する程度である。
- ・器形は、坏形と碗形に分類され、器高指数45以上の碗形が大半を占める。
- ・外面に刻書・墨書が施されたり、煤状物質が付着し「灯明具」として使われたと考えられたりするものが数点ある。
- ・時期・年代観として、Ⅰ期はB-Tm降下前の「野尻遺跡群（註3）」を中心に出土しており、B-Tmの堆積状況から9世紀後葉～10世紀中葉と考えられる。Ⅱ期は、B-Tm降下後「野尻遺跡群」から津軽地方・上北地方に拡がりを見せ、溝跡へ大量廃棄された遺物に混入して出土する例が多く、共伴遺物・年代測定等から10世紀中葉～11世紀中葉と考えられる。
- ・使用目的として、仏具や祭祀遺物との共伴、資料自体に施された刻書・墨書等から、一部の遺跡では「供献具」として使用していた可能性がある。
- ・底面は「ムシロ底」の類が多く、木葉底・砂底・調整底なども見られる。砂底土器は「蝦夷」関連の遺物であるという見方もある。

末筆ながら、本稿の作成にご教示・ご助言くださった方々に記して感謝の意を申し上げる次第である（順不同・敬称略）。

浅田智晴、葛城和穂、加藤隆則、川口潤、木村淳一、齋藤淳、佐藤智生、笹森一朗、神康夫、田中珠美、藤原弘明。

また、今年度で当センターを定年退職される畠山昇・大湯卓二両氏に、尊敬と感謝の念を込めて本稿を贈りたいと思う。両氏は、本稿資料に関わる遺跡の発掘調査・報告書作成に携わってきており、その尽力に敬意を表するものである。長年のご勤続、お疲れ様でした。

註

- 註1：器高指数とは(器高÷口径)×100、底径指数とは(底径÷口径)×100で示される数値。
- 註2：青森県では、古代（平安時代）の遺構堆積土に見られる十和田a火山灰（以下To-a）と白頭山・苫小牧火山灰（以下B-Tm）の2枚の広域テフラが確認されている。それぞれの降下年代には諸説あるが、本稿ではTo-aを915年、B-Tmを940年と捉えることとする。
- 註3：工藤清泰氏は、高屋敷館遺跡以北を「A群」、以南を「B群」としている（工藤：2003）。齋藤淳氏は工藤氏の言うA群を「野尻遺跡群」、B群を「山元遺跡群」と仮称しており（齋藤：2010）、本稿ではこれを引用し「野尻遺跡群」とした。

引用・参考文献

- 青森県教育委員会 1978 『青森市三内遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第37集
- 青森県教育委員会 1985 『独狐遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第99集
- 青森県教育委員会 1994 『朝日山遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第156集
- 青森県教育委員会 1995 『水木館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(2)遺跡Ⅱ・野尻(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1996 『野尻(4)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第186集
- 青森県教育委員会 1997 『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 青森県教育委員会 1998 『高屋敷館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第243集
- 青森県教育委員会 2000 『野尻(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
- 青森県教育委員会 2000 『新町野遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第275集
- 青森県教育委員会 2004 『向田(35)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第373集
- 青森県教育委員会 2004 『宮元遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第359集
- 青森県教育委員会 2004 『宮元遺跡Ⅱ』青森県埋蔵文化財調査報告書第380集
- 青森県教育委員会 2005 『倉越(2)遺跡・大池館遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第389集
- 青森県教育委員会 2007 『赤平(2)遺跡・赤平(3)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第438集
- 青森県教育委員会 2009 『新田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
- 青森県教育委員会 2009 『新田(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第471集
- 黒石市教育委員会 1995 『豊岡(2)遺跡』黒石市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 浪岡町教育委員会 2004 『野尻(4)遺跡』浪岡町埋蔵文化財緊急発掘調査報告書第10集
- 稲野彰子 1995 「いわゆるムシロ底について」『北上市立博物館研究報告』第10号
- 岩井浩介 2010 「早稲田遺跡出土資料の再々検討」『青森県考古学』第18号 青森県考古学会
- 岩井浩人 2008 「津軽地域における古代土器食膳具の変遷」『青山考古』第24号 青山考古学会
- 太田原（川口）潤 1997 「第Ⅴ章第2節五輪野遺跡のまとめ」『垂柳遺跡・五輪野遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第219集
- 小口雅史 2003 「古代東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田aと白頭山（長白山）を中心に—」『日本 律令制の展開』吉川弘文館
- 利部 修 2000 「平安時代の砂底土器と東北部型長頸瓶」『月刊考古学ジャーナル8月号』
- 喜田川清香編 1959 『日光男体山-山頂遺跡発掘調査報告書』角川書店
- 工藤清泰 2000 「浪岡町の古代遺跡」『浪岡町史』第1巻
- 工藤清泰 2003 「浪岡地域における古代・中世の歴史景観」『遺跡と景観』高志書院
- 工藤清泰 2005 「津軽平野の様相」古代城柵官衙遺跡検討会
- 越田賢一郎 1997 「北海道・東北部」『国立歴史民族博物館研究報告第71集』
- 齋藤 淳 2001 「津軽海峡領域における古代土器の変遷について」『青森大学考古学研究所研究紀要』第4号
- 齋藤 淳 2010 「野尻遺跡群の土器編年について」『研究紀要』第15号 青森県埋蔵文化財調査センター
- 櫻田 隆 1997 「底面に砂粒を付着させる土器とその分布範囲について」『蝦夷・律令国家・日本海-シンポジウムⅡ・資料集』
- 佐藤智生 2000 「第Ⅶ章第3節 第319号住居跡の検討」『野尻(1)遺跡Ⅲ』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
- 新山隆男 2009 「第3編第2章第2節古代（平安時代）の遺物」『新田(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第472集
- 早川由起夫・小山真人 1998 「日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日—十和田湖と白頭山」『火山』第43巻第5号 日本火山学会
- 藤原弘明 2007 「五所川原産須恵器の編年と年代観」第2回北日本須恵器生産・流通研究会資料集
- 三浦圭介 1993 「北日本における律令期の土器様相」古代城柵官衙遺跡検討会
- 三浦圭介 1995 「古代」『弘前市史 資料編Ⅰ（考古編）』
- 三浦圭介 2006 「第4章北日本古代の集落・生産・流通」『日本海域歴史大系第二巻古代編Ⅱ』清文堂

青森県内における平安時代(9世紀以降)の非ロクロ成形坏 観察表

図	番号	遺跡名	出土地点	層位	火山灰	共 伴 遺 物			計測値 (cm)			報 告 書			底 面	備 考	類型	
						土 師 器	須恵器	そ の 他	口径	底径	器高	シリーズ名	刊行年	神図番号				報告年代
4	1	新田(2)	第73号溝跡	堆積土上	×	○把手付	○	捺文・羽口・木製品(斎串)	15.0	6.0	5.9	青森県471集	2009	167-1	10C後	編物痕	外面ケズリなし	A1
4	2			堆積土下					12.0	4.4	4.9			ケズリ		外面刻書		
4	3	野尻(Ⅰ)Ⅲ	第319号建物跡	床面	○	○蓋	○	土玉・土製品	14.4	5.9	5.9	青森県277集	2000	76-12	9C末～10C前	—	ケズリはランダム	
4	4			7層					16.3	7.0	4.6			—		ケズリはランダム		
4	5	野尻(3)	第5号建物跡	覆土	×	○	×	—	15.6	6.0	6.5	青森県186集	1996	82-10	10C後	網代痕	ロクロ成形?	
4	6	宮元	Ⅲ-24号溝跡	覆土	×	○塙	○	—	12.2	4.5	5.2	青森県359集	2003	45-110		菰編痕	被熱により還元	
4	7			Ⅳ-6号溝跡	覆土	×	○	○	12.8	5.0	4.7			79-17		菰編痕		
4	8	宮元Ⅱ	Ⅺ-11号溝跡	覆土下	×	○塙	○	—	12.0	4.4	3.4	青森県380集	2004	56-51		菰編痕		
4	9			覆土					10.1	4.0	4.0			56-50		菰編痕?		
4	10			覆土上					12.8	5.0	5.0			56-45		木葉痕		
4	11			覆土					13.8	5.8	4.9			56-48		菰編痕		
4	12			覆土					13.8	6.0	5.1			56-46		菰編痕		
4	13			Ⅻ-2号溝跡					覆土	×	○			○羽口		12.8	5.6	5.4
4	14	宮元	Ⅲ区遺構外	表土一括	—	—	—	—	14.2	6.0	5.4	青森県359集	2003	53-190		菰編痕		
4	15			Ⅳ区遺構外	表土一括	—	—	—	13.2	5.6	5.0			95-177		菰編痕		
4	16	宮元Ⅱ	Ⅺ区遺構外	遺構確認面	—	—	—	—	13.6	5.0	5.6	青森県380集	2004	65-158		オサエ、ナデ		
4	17			Ⅰ層	—	—	—	—	13.8	5.2	5.5			87-138		菰編痕		
4	18	水木館	第80号溝	覆土	×	×	×	—	12.0	4.8	3.8	青森県173集	1995	76-10	10C中～11C	籾痕	外面線刻	
4	19	五輪野	B区第34号土坑	—	×	○	×	羽口	12.0	4.6	5.0	青森県219集	1997	220-23		こも編み圧痕		
4	20	豊岡(2)	第15号竪穴住居跡	覆土	×	○耳皿	○	羽口	12.8	4.5	5.2	黒石市13集	1995	82-1		砂底		
4	21	赤平(3)	第13号住居跡	床直	×	○	○	製塩土器・土製勾玉・菰桶	13.3	5.8	5.4	青森県438集	2007	219-2	10C中以降	ヘラケズリ		
4	22	新田(Ⅰ)	第31号溝跡	覆土上	×	○把手付	○	骨角器	11.4	6.1	5.1	青森県472集	2009	82-166	10C中	ヘラケズリ	ヨコナデなし?	
4	23	新田(2)	第19号溝跡	堆積土	×	○	×	捺文・羽口	12.8	5.8	4.8	青森県471集	2009	157-5		ナデ?	19・24溝は隣接	
4	24			第24号溝跡	堆積土	×	○	×	捺文・支脚	13.4	7.0			4.2		156-20	ケズリ	19・24溝は隣接
4	25	野尻(3)	第47号溝跡	堆積土下	×	○	×	捺文	9.5	5.2	3.5	青森県186集	1996	161-14	10C後	編物痕		
4	26			1覆下	○	○	○	—	11.0	6.3	4.9			77-9		ヘラナデ	外面ヘラナデ?	
4	27	宮元	Ⅲ-24号溝跡	覆土P-2	×	○塙	○	—	13.4	6.4	5.0	青森県359集	2003	45-108		菰編痕		
4	28	宮元Ⅱ	Ⅺ-11号溝跡	覆土	×	○塙	○	—	11.4	6.0	4.4	青森県380集	2004	56-49		ナデ?		
4	29	水木館	第231号溝	覆土	×	○球胴甕	○	木製品(椀)	11.4	5.6	4.8	青森県173集	1995	99-2	10C中～11C	木葉痕	柱状高台杯共伴	
4	30	五輪野	B区第24号住居跡	—	×	○	×	鉄製品	12.2	6.3	4.3	青森県219集	1997	162-2		木葉痕		
4	31			B区第23号住居跡	—	×	○	×	—	13.6	6.9			5.8		159-1	こも編み圧痕	
4	32			B区第21号住居跡	—	×	○	×	—	11.4	5.3			5.0		154-1	こも編み圧痕	球胴甕共伴
4	33			B区第32号住居跡	—	×	○	×	焼・柄杓	11.5	5.2			4.9		177-1	10C後	ハケメ?
4	34	豊岡(2)	第14号竪穴住居跡	—	—	—	—	—	11.8	5.8	4.9	黒石市13集	1995	92-26		木葉痕	内面スス状	
4	35			A区遺構外	覆土	×	○	○	15.6	9.9	7.0			74-1		砂底	布当て痕	
4	36	向田(35)	第108号住居跡	—	—	—	—	—	14.5	7.1	5.5	青森県373集	2004	186-2		砂底		
4	37			遺構外	—	—	—	—	17.0	8.4	5.0			186-1		砂底		
4	38	倉越(2)	第6号竪穴住居跡	P56・60・7b層	×	○	○	捺文系・支脚・鉄製品	12.6	6.0	5.4	青森県389集	2005	163-19	10C後～11C前	—	ヨコナデなし?	
4	39			第109号住居跡	覆土	×	○	○	捺文系(内黒塗)・支脚	13.1	6.0			5.6		155-7	10C後～11C前	外面ナデ
5	41	新田(Ⅰ)	第4号溝跡	覆土上	×	○把手付	○	捺文・木製品(斎串)・瓢箪	12.8	5.2	5.8	青森県472集	2009	48-65	10C後	籾状圧痕		
5	42			覆土上中					12.3	5.1	6.6			48-66		ヘラケズリ		
5	43	新田(2)	第73号溝跡	堆積土中	×	○把手付	○	捺文・羽口・木製品(斎串)	13.0	5.2	6.3	青森県471集	2009	167-2	10C後	編物痕	外面墨書、歪み	
5	44			堆積土上					11.5	4.4	6.0			167-4		薬圧痕、ケズリ	外面刻書	
5	45	三内	H-13竪穴住居跡	覆土	○	○	○	—	11.5	5.1	6.2	青森県37集	1978	94-13	10C中?	砂底		
5	46			H-40竪穴住居跡	カマド中央部	×	○	○	○	13.7	5.4			6.7		94-12	10C中?	平滑
5	47	新町野Ⅱ	第6号竪穴住居跡	覆土	×	○	×	—	12.4	5.0	7.8	青森県275集	2000	69-6H3	9C後～10C前	砂敷	ヨコナデなし?	
5	48			覆土	×	○	○	—	13.7	5.0	7.0			69-6B4		砂敷	ヨコナデなし?	
5	49	野尻(4)	SI-083外周溝	覆土	×	○	×	—	11.8	5.2	6.3	浪岡町10集	2004	Ⅷ68-1		砂底→ヘラケズリ	外面ヘラナデ?	
5	50	宮元Ⅱ	Ⅺ-11号溝跡	覆土	×	○塙	○	—	12.0	4.8	5.5	青森県380集	2004	56-47		編物痕		
5	51			Ⅻ-17号溝跡	覆土	×	○	○	12.2	5.4	5.8			84-94		菰編痕		
5	52	五輪野	Ⅺ区遺構外	遺構確認面	—	—	—	—	12.6	5.6	6.0	青森県219集	1997	65-159		菰編痕、ヘラケズリ		
5	53			A区遺構外	—	—	—	—	12.0	5.0	5.4			92-24		—		
5	54	赤平(2)	第3号住居跡	カマド	×	○	○	鉄滓	14.2	6.2	6.8	青森県438集	2007	86-16	10C中以降	菰痕	外面ユビオサエ?	
5	55	三内	H-12竪穴住居跡	壁溝上	○	○	○	—	11.2	5.9	6.2	青森県37集	1978	93-2	10C中?	木葉痕	外面ヘラナデ?	
5	56	朝日山	第35号溝跡	—	○	×	×	支脚	13.2	6.2	6.3	青森県156集	1994	165-48		ムシロ圧痕		
5	57	新町野Ⅱ	第6号竪穴住居跡	カマド	×	○	×	—	12.0	6.2	5.6	青森県275集	2000	69-6H2	9C後～10C前	ヘラケズリ	ヨコナデなし?	
5	58			覆土	○	○	○	—	10.6	5.6	5.0			Ⅷ43-1		—		
5	59	野尻(4)	SI-117外周溝	覆土火山灰下	○	○	○	—	12.6	7.0	6.1	浪岡町10集	2004	Ⅷ08-34		砂底→ヘラケズリ	外面ヘラナデ?	
5	60	野尻(2)	第122号円形周溝	1層	×	○	×	—	10.8	6.1	5.2	青森県186集	1996	58-3	9C中?	ヘラナデ	外面ヘラナデ?	
5	61	野尻(3)	第15号建物跡	36柱穴	×	○	×	鉄製品(釘)	11.8	5.6	5.5	青森県186集	1996	117-3	9C中?	網代痕	ロクロ成形?	
5	62	高屋敷館	北濠	底面	×	○把手付	○	羽口・鉄滓	13.2	6.6	6.9	青森県243集	1998	19-5		砂底	ヨコナデなし	
5	63			底面					14.4	7.4	6.8			19-6		砂底		
5	64	宮元	Ⅳ-35号溝跡	覆土	×	○耳皿	○	—	12.4	6.0	5.6	青森県359集	2003	87-96		笹葉痕		
5	65			Ⅲ区遺構外	表採	—	—	—	11.7	6.4	5.6			53-189		菰編痕?		
5	66	水木館	第232(89)号溝	覆土	×	○	○	木製品	11.4	5.4	5.6	青森県173集	1995	80-18	10C中～11C	網代痕	柱状高台杯共伴	
5	67	独狐	第2次調査遺構外	Ⅱ層	—	—	—	—	13.0	6.8	6.2	青森県99集	1986	128-1		籾状圧痕	外面ユビナデ?	
5	68	五輪野	B区第33号住居跡	—	×	○球胴甕	×	三鈷統・鉄製品	13.0	6.2	6.4	青森県219集	1997	180-1	10C後	木葉痕	灯明具?	
5	69			—	—	—	×	○	×	10.6	4.8			5.7		180-2	こも編み圧痕	
5	70	豊岡(2)	第22号土坑	覆土	×	○塙	○	羽口	12.0	5.5	6.0	黒石市13集	1995	219-10		—	外面輪痕顕著	
5	71			遺構外	—	—	—	—	11.3	7.0	6.6			139-1		砂底		
5	72	倉越(2)	第5・7号溝跡	15～19層	×	○	○	土鈷・土製品	12.8	6.2	7.3	青森県389集	2005	186-3		砂底		
5	73			58-30	10C前以降	—												